

島のうわさと記憶 ——出稼ぎ、密航、戦争

古 屋 哲
(大谷大学非常勤講師)

1. はじめに

あっちのいちばん端の写真のあるじいさんは明治時代の教員で。このじいさんが鹿児島に勉強しに行くときは、船もなくて帆掛け舟で行ったらしいですね。それで、この人の妹ちう人が、そこの浜に座って、兄さん、兄さんちって、泣いたちう話を聞きました。

昭和初期まで島で漁や交通に使われたという「帆掛け舟」が、下甕郷土館に展示されている。長さ4.8メートル、幅1.8メートル、一枚布の帆を張り、ともろ櫓を備えた小さな和船。かつて日本近海のあちらこちらで見かけられた伝馬船である。そんな小舟に乗って向学心に燃える島の青年が本土まで渡ったという海を、私は940トンのフェリーで島に向かった。台風が一週間に二つも通過する天候で時化を心配したが、鹿児島側の申木野新港を出た船はまったく揺れを感じさせず、東シナ海海上をすべるように進むと、約45キロを1時間15分で甕島諸島の最初の港である里に着いた。地図で見たとおり、切り立った海蝕崖が並ぶ美しい島々である。

私が下甕島手打地区を訪れたのは、20年前の1997年2月に起きた中国人密航事件について、現地をこの目で確かめ、住民から話を聞くためだっ

た⁽¹⁾。当時、全国で密航船による集団密航事件が海上保安庁や警察に摘発され、大きく報道されていた。そしてそれらの事件を理由にして同年4月に7年ぶりの入管法改正が行われ、さらにこの年の全国的な捜査態勢と入管法改正を嚆矢として、その後現在まで警察の外国人監視体制が整備されてきた。

そればかりではない。下甕島の事件が報道機関の特別な関心を惹いたのは、島内の密航者を捜索する「山狩り」に自衛隊員が参加したことが、自衛隊法の定めのない違法な出動ではないかと疑われたからだった。この批判に対して当時の久間章生・防衛庁長官は、活動そのものは適切であり、法的手続をめぐる議論は重要ではないと主張した。警察の領分とされてきた事態への自衛隊の出動を正当化する論法や、小型外国船や少数の外国人の領海・領土への侵入を軍事的脅威と見なす認識は、後に「警護出動」の法制化や「離島警備」の整備を推進する議論のなかで取り上げられる。したがって回顧的に見るならば、97年の下甕島の事件は、国家的暴力つまり警察と軍事の冷戦後の方向を定めた二つの動きの始まりに位置していたことになる⁽²⁾。

とはいえ、もちろん当時の私は、後の事態の進展を知らなかった。私がこの事件を記憶したのは、むしろ、身を潜める異民族の民間人を捜索す

る日本軍人のイメージに戦慄を覚えたからであった。それを忘れないために私は事件について何度か書き記したが、いずれも新聞記事などを資料にして書いたもので、島を訪れるのは今回が初めてだった。

ところが、島の人びとが来訪者の私に語ってくれたのは、むしろかれら自身の出稼ぎと旅の経験だった。しかもかれらが出稼ぎの日々や旅の記憶を懐かしく思い出し、いまもそこで暮らす兄弟や甥姪、子や孫たちと連絡をとるといふ土地とは、私が住み、前日までそこにいた京都をふくむ京阪神地区だったのである。私はなにか裏返しの世界を見せられたような、奇妙な感じがした。だがすぐに、意外に思ったことを恥じなければならなかった。社会科学に携わる者ならば、まして移民研究を口にする者であるならば、近現代史のなかで九州の農漁村や離島の住民が、京阪神など都市部、工業地帯との間に労働移住のネットワークを築き上げてきたことは、常識として知っておくべき事柄なのだから。

話を聞かせて下さった人びとは、年齢で70代から80代、おおむねアジア太平洋戦争中に生まれて学齢期を過ごし、終戦前後に中等教育を終えた世代である。そしてこの世代の多くの若者にとって中学卒業とは、戦後間もなく復興へと向かった京阪神や中京地区への集団就職——女子は紡績、男子は製鉄・機械——を意味していた。

かれらが話してくれたことを、たとえば密航者について語ったことを、私が理解し書きとめておくためには、まずかれらの経験とそこから見える世界を知るべきではないか。遠回りだが、私はそう考えざるをえなかった。

2. 近代下甕島の労働移住

下甕島の人口は、20世紀に入る明治期の後半から第二次世界大戦後の1955年ころまで、戦争末期

と終戦直後の大移動を別として、大きな変動がない⁽³⁾。ここでは、この近代の期間をつうじて島の社会経済構造がおおむね維持されてきたと仮定して、それを大づかみに理解することにしよう。この時期の島の社会経済を直接しらべた調査はないが、戦後、高度経済成長の始発点であり島の人口減少の、そして新たな労働移住の開始時期にあたる1955年と1961年に島で行われた社会学的調査と2004年の『下甕村閉村記念 下甕村郷土誌』をおもに参照して、これを考察する⁽⁴⁾。

近代の下甕島の村落では、薩摩藩政時代の身分制が解体された後も、百姓集落の「在」と漁民の「浜」、そして士族の住む「麓」の区分が残された。たとえば、薩摩藩政の中心であった手打（1960年時点では大字、2004年郷土誌では校区）では、1961年の時点でも三つの区に職業の傾向を見出すことが可能である⁽⁵⁾。それによれば、麓、在、浜の各区はそれぞれ200戸前後で、麓では「農業」に従事する戸数をもっとも多く（6割）、役場職員などの「公務自由」がこれに次ぐ（3割）。在ではほとんどが「農業」（8割）で、浜では「漁業」（3割強）と「日雇」（2.5割）が多く、「農業」「商業」「公務自由」がそれぞれ1割となっている。ただし、島民の基本的な生業は半農半漁であり、ほとんどの世帯、集落が何らかのかたちで農業と漁業の両方にかかわっている。そうした生活から島外への労働移住が生じたのである。そこで、農業と漁業のそれぞれを概観しておくのがよいだろう。

まず農業について。島は丘陵で覆われており、近代の下甕島では狭い平地に水田、畑が開かれ、斜面には山頂にむかって段々畑が広がっていた。条件の悪い急傾斜地の段々畑の多くは、山林原野を焼畑方式などで開墾して耕作し、数年後に放棄する「切替畑」だった。水田は貴重とされ、平地だけでなく斜面にも階段状に開かれたが、1960年

でも下甌村では水稻の収穫面積は4分の1で、残り甘藷（サツマイモ）や麦の畑であった⁽⁶⁾。比較的広い平坦地のある手打は「下甌村唯一の水田集団地」である（1960年代には土地改良事業が実施された⁽⁷⁾）が、耕地が狭く生産性が低いという基本条件は同じである。「作半」「刈分」という現物折半の小作制度が存在し、かつては島内の身分的關係を支えたが、少なくとも手打では早い時点で解消していった⁽⁸⁾。

農作物の自家消費についてみると、主食の基本は甘藷の生食と乾燥芋「切干」「コッパ」で、これを麦で補っていた。米は貴重であり、婚姻で握り飯として供されるなど特別な機会に食された⁽⁹⁾ほか、現物交換でも用いられた。米食が普及したのは戦時中の配給制度からだという。だが、二つの調査報告は、農産物の収穫量が自家消費を満たしていないことを強調している⁽¹⁰⁾。

現金獲得の手段としても、甌島の農業は弱体だった。1960年時点で下甌村の農産物販売収入は年間一戸あたり1万4千円であり、営農条件の比較的よい手打では2万7千円前後になるが、それでも全国で最も低い鹿児島県全県平均の6万9千円を大きく下回っていた⁽¹¹⁾。

近代下甌島の主要な換金作物はアルコール製造原料などに用いられる甘藷切干であるが、多くの場合、この甘藷は部落共有の山林原野を各戸が自由に、あるいは一定のきまりにしたがって開墾した耕作地で栽培された⁽¹²⁾。これが斜面に広がる切替畑となった。下甌島では、耕地の絶対的不足と農家の二男、三男対策のため、既存集落周辺の山林原野が切り開かれただけでなく、島の内外に新たな集落をつくって開墾を行う分村や農業移住もたびたび行われた⁽¹³⁾。

他方、共有地を分割してその耕作権を交替で割り当てる入会制度を、甌島では「割り替え」と呼ぶ。割り替えは切替畑だけでなく、通常の田畑についても戦後農地改革のころまで広範に見られ、

1961年当時もなお一部に残存していた⁽¹⁴⁾。さらに山林原野での炭焼、輸出向け「鹿の子百合根」や搾油用の椿の実の採取、さらに磯でのフノリ・テングサ採取などでも、その権利の割り替えが行われた。これは共有地に見いだされた比較的新しい市場向け資源を各戸が利用しながら、これを集団として管理統制し、収益の一部を公共の費用に編入するための歴史の浅い方法であることが指摘されている⁽¹⁵⁾。

このように甌島の農業は、不利な自然条件のもとで、開墾と入植によって小規模・零細な各農家が営む生存経済と市場指向の収奪型の資源利用がおこなわれる農業フロンティアを内に組み込みながら、その土地利用と農業生産に共同体的な規制をくわえているところに特色がある。しかし、食糧自給と商品生産のいずれもが不十分であるため、農業フロンティアのもうひとつの側面として、住民のかなりの部分が兼業として資本主義的労働へと向かった。そのおもな行く先は島内の漁業であり、あるいは島外への出稼ぎだった。

漁業については、自家消費はほとんど問題にされず、もっぱら商品生産の産業として調査研究されている。とくに定置網や地曳網などの網漁業は、一定の資本蓄積とそれをもとにした網の改良や船舶の動力化・大型化などの技術革新、そして統制のとれた労働者集団を必要とする労働集約型産業である。もともと甌島沿岸は好漁場であり、島外・他県漁業者の入漁も多かったが、甌島の漁業者のほとんどは船舶の大型化や沖合・遠洋への進出に立ち後れ、小規模、零細な漁家にとどまった。とくに手打の浜ではこの傾向が顕著で、1955年の調査で記録されたおもな漁業形態⁽¹⁶⁾は、網1統に3人から20人が従事する沿岸の追込網・磯建網⁽¹⁷⁾と、船1隻に3人から8人が乗り組む雑魚一本釣だった。また、手打の在では住民130人が2統の地曳網に従事していた。調査を行った岩切成郎は雑魚一本釣を取り上げて、漁業収入だけ

では生計を維持できず、また漁民の耕作地は狭いため、出稼ぎを余儀なくされて浜は「老人村」になっている、と述べている。また、漁の操業が季節的に限られるため労働力の組織形態は柔軟性を要求されるが、近代の下甕島ではオヤコ（親方—子方）と呼ばれる父権的共同体的集団⁽¹⁸⁾の側面と日雇＝自由労働者の側面が混在していたようである。さきほどみた統計では手打の浜の世帯の4分の1が「日雇」だったが、当然その就労先は島外にも求められただろう。また、島外のより大規模な網や船団に出稼ぎに行くときには、オヤコ集団がそのまま出稼ぎの単位になることもあった。これらの意味で、島の漁業は、労働移住への牽引力ともなっていたのである。

以上のように、島内では農業も漁業も住民の必要を満たすには十分ではなく、島民の生活は戦前からかなりの比重で出稼ぎに依存していたのである。戦前出稼ぎ先には、漁業の他に阪神地区などでの工場労働があった。

工場労働者としての出稼ぎが始まったのは、第一次大戦当時、長崎県の三菱造船所ではないかと考えられている⁽¹⁹⁾。1920年代半ばから阪神地区への出稼ぎが盛んになり、上甕島の例⁽²⁰⁾だが1927年の県外出稼ぎ者約650人のうち、兵庫・大阪が4割強、熊本・長崎・福岡が2.5割を占めている。総数では男女に差がないが、女性の就労先が繊維産業であるため、九州が少なく大阪・岐阜に多い。また、24人が「満州・台湾」に渡ったことも目を引く。

出稼ぎ先はツテで決められることも多く、きまった土地に集中する傾向も現れた。兵庫県尼崎の製鉄業への出稼ぎは早い時期に始まり、その後は定住する甕島出身者も増えた。あとでみるように、戦後も尼崎への労働移住は続いた。

さて最後に、とくに若者を出稼ぎに誘った要因、あるいは青年にとっての出稼ぎの意味を、もうひとつ挙げておきたい。

2004年『下甕村郷土誌』の執筆者は、下甕島西岸の集落に住む、1930年代生まれの3人の男性の戦後まもないころの漁業出稼ぎの体験を紹介し、最後にこう述べている。「多くの人が語ることであるが、このような漁業出稼ぎは、逼迫した中で最終的に選び取ったというよりも、みんなが行くので自分も行ったというような、青年時代に世間を見ておこうという気持ちで行った人がほとんどである」⁽²¹⁾。また、同じころ西岸の別の集落から出稼ぎに行った青年たちは、ニセー組と呼ばれた、あるいは青年団と名をあらためていた村の若者組に、「礼金」を払うことになっていた⁽²²⁾。消防、海難救助や夜警といったニセー組の役目を在村の者に負担してもらう礼である。ニセー組はまた、そこに組み込まれる若者自身が村落生活に相応しい成員であり働き手である一人前の大人になるための青年教育機関でもあった。出稼ぎとニセー組・青年団とは、青年の人格形成において矛盾しないまでも競合する関係にあったのである。

別の角度からも考えてみよう。1960年時点で手打の麓と在の農家を比べると⁽²³⁾、農家数も、1戸あたりの耕地面積と農産物販売収入も大きな違いがなかった。違っているのは兼業の職種であった。在の兼業農家の半分弱が漁業を行っているのに対して、麓では漁業を兼業とする家はほとんどなく、かわりに村役場などの事務職員が4分の1を占めている。さきほどみたように、麓では職業別戸数でも「公務自由」が3割を占めていた。このような職業選択には、中等教育の裏付けが不可欠である。学歴についての調査はみあたらなかったが、「麓郷士のもった社会的な慣性は、維新後の新体制に対する適応として、公務自由業的なホワイトカラーを選ばしめた」⁽²⁴⁾と考えることが可能である。つまり薩摩藩武士の「郷中教育」の伝統を継ぐ明治期の麓には、学習を尊び実践する「社会的慣性」ないし文化資源が存在し、それが近代をつうじて有効だったと考えられ

るのである。かつて上甕島の里地区の麓では、ニセ一組で夜学の私塾が開かれ、上の年齢階梯の者が若者に習字や算盤などの実務を教授したという⁽²⁵⁾。1909年に13歳でカツオ船に乗り込んだ漁師が、「漁の合間に本など読んでいると『本など読まじ、裸になってとっくめ』『一人前の漁師になるには本などよむより、海を相手に鍛錬せよ』と言はれたが、向学心のある人は先輩に隠れて本を読み勉強した」と述懐する⁽²⁶⁾時代である。

労働移住には、経済的要因には還元しきれない、別の要因がはらまれている。それはたんに現金収入を得る手段でなく、青年期の社会的人格を形成する過程の一部をなす旅でもあり、その意味で島内の若者組・青年団や学校教育と、島外の出稼ぎや兵役、中高等教育はひとつの文脈のなかで考えることができるのである。

近代の下甕島の社会経済構造には労働移住が組み込まれていた。そしてこの労働移住が、高度経済成長以降は、構造の再生産を危うくするのである。

3. 集団就職

第二次世界大戦後、戦地、占領地からの復員や阪神地区などの出稼ぎ、移住先からの帰還者によって、甕島の人口は一時的に膨れあがるが、多くの人びとは生活の糧を求めてふたたび島の外に出立した。こうして始まった戦後の出稼ぎ、労働移住には、戦前のそれとのあいだに連続性がある。戦後しばらくの就労先、出稼ぎ先は、戦前と同じく各地の網漁業と阪神工業地帯だったのである。

戦後の漁業は、甕島周辺から全国各地にかけて沿岸・沖合で巾着網・巻き網⁽²⁷⁾や大型定置網漁の漁場がしばらくのあいだ活況を呈し、甕島の多くの漁民が戦前から関係のある船主・網元の船子・網子として出かけた。また阪神地域への出

稼ぎについては、『郷土誌』はこういう⁽²⁸⁾。「戦火を避けるために、大戦中移住先の阪神地区より甕島に『戻って』いた人々は、戦後の島内の過剰人口と阪神地区の工業復興の動きにより、再び『慣れ親しんだ阪神』へ『戻った』のである」。したがって「甕島の住民にとって〔漁業と工場労働の〕双方の道ともに新規開拓の労働の場ではなく、古くから縦横無尽に張り巡らされた選択肢が戦中に途絶え、それが戦後復活したことにすぎない」。

しかし、いくつかの点で、戦後の出稼ぎは戦前のそれとは異なり、その違いは年を追うごとに顕著になっていった。

まず、沿岸・沖合漁業がしばらくすると不振に陥ったため、出稼ぎ先は阪神・中京地区そして東京首都圏の工業・建設労働へと大きくシフトした。それとともに中学卒業者の集団就職が始まり、後には高校進学率も上昇した。これが、村落の再生産メカニズムに、深刻な打撃をあたえたのである。

1961年の手打中学校卒業生の進路をみると⁽²⁹⁾、卒業生全体で男29人、女33人、計62人のうち、自宅に留まる者がそれぞれ5人、1人、計6人であるのに対して、就職者は男18人、女24人、計42人、進学する者が6人、8人、計14人となっている。下甕村の5中学校全体と比べると、手打中学は自宅に留まる者が少なく、高校進学者がやや多い。

手打中学校卒業生の就職地は、近畿の22人と中部の14人で大半を占める（5中学全体も同様）。このように「就職先が阪神・中京に集中するのは、就職が親戚、知人、先輩などとのつながりを求めて行われることが多いからである。就職していく子供たちにしても、また子供を手放す親たちにしても、まったくつながりのない土地へ行くよりは、なんらかのつながりのある土地へ行くほうが安心なのであろう」と調査者は考えてい

る。おもな業種は男子が機械・金属、女子が繊維関係で、給与は1961年現在、男女とも月に6,000～7,000円、手取りは4,500円前後。そこから毎月1,000円ほどを島の実家に送金するという。就職者の多くは島に帰らず、女子も多くは就職先で結婚する。出稼ぎではなく完全離島である。ただし、親が老齢になると家を継ぐために長男一家が帰村することが多い⁽³⁰⁾。

島には高校がないので進学者は島を出なくてはならず、一般に高校卒業後も島へは帰らない。高校進学は1961年現在で月に8,000円ほどの費用を要する⁽³¹⁾から、進学にはかなりの経済力を要する。

島にとどまった壮年層の男性もふたたび島を出ることが少なくない⁽³²⁾。その場合、完全離島ではなく出稼ぎだが、一年以上の長期にわたることもあり、留守家族では女性や老人が農業を行う。

島の人口動態をみると、戦前の人口流出は自然増加分にとどまっておらず、20世紀に入ってから第二次世界大戦まで表面上は島の人口はほぼ横ばいだった。しかし1950年ごろから自然増加分を超える流出がみられるようになり、とくに工業地帯への出稼ぎと集団就職が本格化する1955年ごろからこの傾向が著しくなったのである⁽³³⁾。

私が話を聞かせていただいた民宿のご主人の経歴は、典型的な浜の漁民のそれだった。ご主人の父親は、戦後、20トンの運搬船を経営し、7、8人を雇用していた。本土への上りでは特産の木炭、鹿の子百合の根を、下りは専売品を運送する指定船だった。また島の西岸の片野浦に釣りの許可をもち、ブリの飼付漁⁽³⁴⁾などを行う漁民でもあった。母親は長崎から嫁に来た方で、運搬船経営を切り盛りする気丈な人だったという。

ご主人は1936年に三男として生まれ、1951年の中学卒業後、1年ほど学校の「小使い」をするが、その後兵庫県の尼崎で就労する。住友、クボ

タなどで勤め、クレーン免許も取得した。1965年、29歳のときに、両親が寝込んだため島に戻って漁師になる。乗子を雇う船主であり、ブリ飼付けもやっている。しかし「漁師だけでは子どもを学校出せない」ので、1977年ころ現在の民宿経営を始めた。1970年代初めから、浜では建設労働者や釣客を相手にした「民宿ブーム」だった。そのかわり、田畑で農業もしてきた。

ご主人の兄弟は、尼崎に1人、大阪に「2、3人」、京都に1人、横浜に1人いた。ご主人とその兄が、島に戻った。

民宿の女将さん、つまりご主人の配偶者は、1940年に京都市右京区で生まれた（私も覚えのある場所だ）。父親は「学校は行ってないのに」島津製作所で働いていた。各地の大都市への空襲がはじまった1944年に家族で帰島し、父親は定置網の製図をして「網船頭」になった。女将さんは1955年に中学卒業、集団就職で大阪に行った。その間、ご主人と結婚し、1965年に長男をふくむ家族で帰島している。京都にはいまも弟が住んでいて、女将さんを京都見物に誘う。

手打コミュニティセンター長の日笠山直宏氏は、1940年ころの生まれで、農家の出である。一般に農家の二男、三男は田畑がもてずに島の外に出て行くが、氏も（おそらく集団就職で）尼崎製鉄で2、3年働いた経験をもつ。日笠山氏は、父が戦死し母も早く亡くしたので祖父母に育てられ、その祖父母の世話もあったので早く島に帰り、役場に就職した。尼崎には甌島の人が多く「島よりも多いくらい」だった。ほとんどが漁師の出身だった。

信子さんは、1935年ころの生まれで、おそらく麓の家の方である。1950年に大阪の「森田紡績」へ集団就職した。12時間の二交代勤務で、夜中も働いた。1年10か月したころ、家から「ハハキトク、スグカエレ」の電報が届いたので急いで帰ると、島の役場にいた兄に迎えられ、じつは「そこ

「紡績工場」の噂が悪い」と聞いてウソの電報で妹を呼び戻したのだと知った。

その後、島で1年ほど「ふらふらとして」、今度は名古屋の「近藤紡」という紡績工場に就職した。そこでは8時間の三交代勤務で、信子さんは「一日も欠席しなかった」。そこで4年間働いたのちに、「じきに結婚する」とのことで親に呼び戻された。

信子さんのお話しに感じるのは、彼女の教育への意欲である。信子さんは男が7人、女が2人の9人兄弟で、信子さんと二男の2人をのぞいてみな高校を卒業し、東京に行った。一つ違いの妹さんは川内商高を卒業し、東京の会社に就職した。高校を卒業すると事務仕事に就けたという。山形の人と知り合って結婚し、いまは山形にいる。信子さん自身は、「昭和25年に中学校を卒業し、1年してから働きに行った。中学校では同級生が100人いたが、高校に行ったのは、女が2人、男が3人。そんなものだった。私は9人兄弟だったので、行けなかった。進学する子は残り勉強をしていてうらやましかった。私も勉強をしたかった。勉強のできる子でも紡績工場に行った。勉強できなくてもお金のある子は高校に行けた。紡績工場のトイレで、ちり紙の代わりに置いてある新聞紙の広告を見つけ、京都の通信教育を1年やった」。

最後に手打のバス停で出会った老女の話を紹介したい。いまは「団体で」（おそらくグループホームで）暮らしているが「気を遣うので」、昼間はこうして道ばたに座り込んで通りかかった人に話しかけている。「しゃべる人もおらんし。さびしいもん」。私がお話を聞いた人のなかではいちばん年下の73歳、1943年ごろの生まれで、「まだ若いんやけど」というがすっかり老けて見える。老女の母親は山形出身で、大阪で手打出身のひとと知り合い結婚、「こう、なんか仕事しよ

う」とここに来たのだという。老女は手打で生まれた。民宿のご主人とは遠い親戚だという。

彼女は大阪で結婚したが、酒癖が悪いので別れた。二人目は手打の地元の人だが亡くなった。三人目がまた大阪の人で「学校の先生」をしていたが退職し、建設会社で働いていた。帰島してからは、夫婦で建設会社で働いた。「だんな」は5年前、肺がんで亡くなり、それからは独り暮らしになった。

これまで「墓石をこう持ち上げる」石工の仕事、大工、建設会社、「病院の先生の草刈り」などの力仕事をしてきた。「いろいろなことした。子ども、学校だそうと思ってな」。そんなふうに「働いて高校まで出した」子が四国に、「おばあちゃんに育ててもらった」長女が薩摩川内市にいる。ひとりになってからは川内の子を頼っているが、「あてにならんわ。もう文句ばっかいてな。いまの子どもは頼りにならんから、自分は自分で生活してんの」。「昔、無理したから」腰を悪くしていて、「歩くのにやっと」。串木野の病院に通っていて、「おととい行って、きのう帰ってきた」。

京都に帰るといって、「気をつけて帰ってください」と送られた。「うちらも京都の見学してきたけど、旦那が京都でも仕事しとったから。ここで、[建設の]仕事したんや、いうことを言った。いっしょに、そんなときは冬だったの。雪が滑って、靴で、はいとったらすべって」。

こうして人びとの足取りを追うだけで、めまぐるしいほどだ。ひとつ、気がついたのは、島を歩き来する人びとのあいだで、かつては島外から手打に移住した人が少なくなかったことだ。とくに女性が婚姻をつうじて島に引き寄せられている。1970年の下甕村の統計には、「韓国・朝鮮」籍の男1名、女2名が記録されている⁽³⁵⁾。

4. 密航者のうわさ

1997年2月の中国人密航事件に、手打の人びとはどのように対応したのか。当時、下甕村長を務めていた小倉義富氏にお話をうかがった。小倉氏は現在、鹿児島市内で暮らしており、私は電話でお話を聞いたが、氏は事件の経緯を記録したメモにもとづいて説明して下さった。

それによれば、密航者たちが最初に村民に目撃されたのは2月3日朝6時半ごろ。密航者たちは手打港の旅館「新栄館」を訪ね、これを旅館の女将さんが警察の手打駐在所に通報した。7時半ごろに、駐在所長が小倉氏に連絡し、氏は7時50分に村民に向けて行政無線放送で「外国人が上陸した模様。不審な人がおれば通報してもらいたい」と広報している。8時10分には、同じく放送で消防団が招集され、これ以降、住民が警察の捜索に参加する。8時半には役場課長会議が開かれ、その後、役場職員も捜索に参加した。警察官は数人しかいなかったから、密航者を捕捉したのは、ほとんどが住民であろう。

9時40分には密航者の大半である12人が捕捉されており、駐在所から中央公民館へ移された。鹿児島県警から増員の第一便が到着したのは11時半だが、すでに正午の時点で密航者は20人全員が捕まっていた。簡単な取り調べのあと、密航者は午後4時から2回に分けて内地に搬送された。

事件そのものはこれで終わったのだが、まだ密航者が潜伏しているかもしれないとのことで、警察の捜索は12日まで続けられた。消防団と役場職員も翌4日にはこれに参加している。また、4日に自衛隊員30人も出勤し、これがのちに疑問視されたことははじめに述べたとおりである。

事件への住民の動員は、つぎのとおりだった。3日には消防団員67人と役場職員25人の計92人。4日は消防団員103人と役場職員7人の110人。女たちも婦人会として炊き出しをして、密航者と捜

索協力者におにぎりを提供した。炊き出しの参加者は、3日に18人、4日に14人で、5日にも2人が出ている。また、住民のなかから役場職員と中学校教師の各1人が中国語の通訳を務めた。

このように記すと、なにか緊迫した雰囲気も感じるが、現場の状況はどうだったのだろうか。小倉義富・元村長は「相手が騒いだり、暴力を振るったりしたわけではないので、大騒動になったというわけでもない。上陸した人たちは、おとなしい、従順な人たちで、平静な態度だった」。手錠などの使用について尋ねると「かけていない。力づくではなく、誘導すると素直についてきた」とのことだった。お話を聞いた他の人びとも、捜索、捕捉のなかで手荒なことはなかったという。

小倉氏を紹介して下さった手打コミュニティセンター長の日笠山直宏氏のお話からは、事件の当日も、集落では平穏な日常生活が送られていた印象を受ける。そのころ日笠山氏は役場の職員で事件当日もいつものように出勤したが、ほかの多くの住民も普段の生活をしており「緊張感はなかった」。そもそも密航者は午前中に捕まってしまったので、日笠山氏をふくめて「多くの人には見ておらず、後から聞いて、ああそうだったのか、と思ったのではないか」。そして住民には密航者について「悪意のある受け止め方をした人はいなかったのではないか」という。ただ、朝早く捜索の警察官が日笠山氏の家に来て床下まで探していったので、掛けたことのなかった鍵をそれからは掛けるようになり、いまでも掛けているそうで、そこには不安の影がうかがえる。

では、住民の目には密航者はどんな人びととして映ったのだろうか。私が詳しくお話を聞いたのは、集団就職の体験を語ってくれた民宿の女将さんと信子さんである。当時ふたりは60歳前後で、高齢な島の住民のなかではまだまだ主要な働き手だっただろう。女将さんは最初に密航者を目撃して通報した旅館の近くで民宿を営業しており、信

子さんはじつは通訳を務めた役場職員の配偶者である。これらの点で2人は第1次情報源に近いところにおり、そのためそれぞれ密航者発見の状況と、警察の取り調べのようすについての話は詳しい。しかし、2人とも婦人会の炊き出しには参加しておらず、密航者を目撃していないので、いずれにせよ彼女たちの話は伝聞情報である。しかも2人の話はいくつかの点で内容も、言葉遣いもよく似た紋切り型であり、ステレオタイプである。したがって、それらは「手打の女たちのうわさ話」という等質な言説空間の一部をなしており、また当時のうわさから取捨選択されて定着し、20年近く後まで記憶に残った物語の断片であると考えられる。

2人が繰り返し口にしたステレオタイプとは、「騙されて来た、お腹がすいていた、かわいそうな」密航者だった。「お腹がすいていた」密航者の姿を描く女将さんの語り口は、こんなふうだ。

婦人会が出て、炊き出し、おにぎりして、涙がでてきたってよ [と涙が流れる手真似]。もう、涙が出た、って言った。食べる姿を見て。

[質問者：どうして涙が出たんですか] 何日か食べてないんでしょう。新栄館に来て [たどたどしい口調を真似て] 「おなかぺこぺこ、しょくじ」そして「シャワー」って言ったんだって。それで捕まって。その、10人ぐらいの捕まった人たちが、婦人会の人たちが中央公民館で炊き出しして、おにぎりを出して、そのおにぎりをね、もうお腹すいてるから、その、つかんでね、もう、いちはやく [と手を出す真似]。ほら、やっぱり人間って、お腹がね、すいたら、もう最初口に入れたものが一生忘れられない、あの、餓死状態になってたら、ね、そういう、やっぱり、あれだったんでしょう。で、もう、それを食べる姿を見て。

炊き出しにでた婦人会の女たちと新栄館の女将が情報源となって、島の女たちがうわさ話を繰り返し、交換し合って練り上げた物語である。そして「騙されて来た」については、

騙されて来とんよ、この人たちは。そのほら、人間仲買人か。この人たちはね、そういう悪い人から騙されてん来てんのに、売られて来とんのに、かわいそうにね、ってね。ビデオを見せるらしいね、中国は。日本に出稼ぎに行ったら、こんな豪邸が建つよ、って。

中国は、ほらね、稼がないし、日本に行けば、もう日本はね、金になる、そしてこんなすばらしい豪邸ができるよ、っていって、騙されて来とんの。一時、そういうのがあったもんね。かわいそうになあ、ほんとに。

結局、ほら、処刑されるんでしょう。あんなして、金が儲かるからって、中国に帰ればいい暮らしができるよってゆって、騙されてきて、結局後戻りしたら、もう処刑にするらしい。

婦人会の女たちは密航者から身の上を聞くことができないから、「騙されて来た」話の出所は女たちではない。「騙されて来た」という主題の出所も、「処刑」についても、通訳の役場職員が密航者から聞いた話が始まりである。「ビデオ」や「豪邸」はメディアから得た情報による潤色かもしれない。

当時、通訳を務めた元・役場職員から私が聞きとった内容は、そのとき女たちが聞いた話の原型に近いのだろう。かれはこう教えてくれた。「その人たちが言うには、私たちは日本のお金にして400万、作って来た。それで、仕事があるということだった」。それなのに、「働く場所には連れていかんで、こんなところに置き去りにして、とくやしがっていました。それは、ほんとにかわいそうだったですよ」。「処刑」については、「中

国人がいうには、ここから直接、中国に帰らされたら、即、銃殺される、殺されるから、一年でもいいから、一年以上、牢屋の中でもいいから、日本に留めさせてくれ、ちゅういったんですよ」。

集団就職のお話をしてくださった信子さんは、この元職員の配偶者である。彼女も、住民の反応について「ただもう、密航船で来た、くらいのものであったでしょうね。かわいそうになあ、だまされてきたんでしょねえ、いうくらいだと思いますよ、みんな、この村の人は」という。だが彼女の話には、日笠山氏の感じた漠然とした不安が具体的な恐怖となって姿を現している。

あの、診療所の上の、あの辺に〔密航者が〕ひとりいたらしいですよ。私といっしょに袖を織りにきとった女の子のところに行ったらしくて、朝、誰かおるなあと思うて、旦那さんは亡くなっておるし〔独り暮らしなので〕、こうして〔こわごわ〕見たら、庭に座っておったらしいですよ。もう恐くなってなあ、下の方に走って行って、おじさん、おじさん、知らん人がうちに上げて座ってるって。それが、ほら中国人で。じつはこうこうやって中国人の人が何人か降りて、あちこちに散らばっているらしい、と〔その隣のおじさんに〕聞いたっち。

もう、なんであんたは、私たちが言った、なんであんたは握り飯でも握って食べさせなかった〔と言ったら〕、もう、どこの人か分からん人が座ってるのにな、そうやって断ったんですけど。握り飯くらい食べさせたらよかったのに、と私たちが言ったら、恐くてもう、と。知らない人だから。おお、そんなときの恐さ、言われなかった、ち。

密航者に出くわした女性の恐怖に共感しながらも、女たちはそれを「お腹がすいていた」物語に包み込んでしまったようだ。

こうしたステレオタイプが成立し、流布し、維持される言説空間は、その住人たちが共有する認識の枠組みを前提とし、その枠内で成立する。うわさする島の女たち男たちが、「騙されて来た」出稼ぎ人のイメージを繰り返し交換し、確認しあえるのは、それがかれらの出稼ぎ体験に裏付けられた認識枠にすんなりとあてはまるからであり、あてはまることをおたがいに知っているからだ。

戦後、1970年代までの農漁村からの出稼ぎや集団就職を経験した人びとであれば、だれもが「募集人に騙された出稼ぎ」の物語を知っているだろうし、「騙される」ことが出稼ぎ人を待ち構える最大の危険のひとつであると考えない者はないだろう。すでに見たように、下甌島、手打からの集団就職が「親戚、知人、先輩などとのつながり」を頼って阪神・中京に集中するという現象も、裏を返せば「騙される」の危険を避けるために他ならない。また、信子さんが大阪から島に呼び戻されたのも、兄がそうした危険を感じたからである。むろん、1970年代までの日本の出稼ぎにかぎらず、資本主義世界では、いつでもどこでも、労働移住が「騙される」危険をおびた“命がけの飛翔”であることは、よく知られている。ただ、島の人びとは、それを身体感覚をともなって知っているのである。

ここで私は、女将さんや信子さんが「騙されて来た」と口にするたびに自分自身や家族、友人の出稼ぎ体験を思い浮かべていた、と考えているわけではない。そうした実証主義的な因果関係の思考は、人びとの世界観とその内側における解釈を他者である私が理解する努力とは別のことである。密航者についての断片的な情報をもとに、「騙されて来た」出稼ぎの物語を集合的に練り上げ、維持するためには、集合的な認識の枠組みは必須である。そして「騙される」危険の認識は、かれら自身の出稼ぎ体験によって「もっともらしさ plausibility」を獲得し、自分のそれであれ、

隣人やまったくの他人のそれであれ、出稼ぎの記憶と物語が語られるたびに「もっともらしさ」を維持していると考えられるし、逆にもしも集合的な出稼ぎ経験がなければ、「騙される」危険の認識が確固とした認識の枠組みとして共有され、維持されることはないだろう。

元村長の小倉氏は、30分ほどの電話での話の終わりに、「あとで考えると“もし武器でも持っていたら”と恐かった。想像だが」とつけ加えた。日笠山氏もまた、密航事件は「戦争法でいう『グレーゾーン』ではないか。備えがない。[下甌島には]自衛隊もあるが、中国軍が本気で攻めてきたら防衛できないのではないかと最後に言った。脅威の物語は、女たちの語りとは別の文脈に属する。それは、軍事の物語である。そして下甌島には航空自衛隊のレーダー基地が存在し、その事実は住民の軍事をめぐる認識に「もっともらしさ」を保証しているはずである。では、住民は基地と軍事をどのように認識しているのだろうか。

5. 下甌島分屯基地

弾道ミサイル防衛（BMD）システムの警戒装置として、現在、全国で11か所の固定式警戒管制レーダーが作動しているが、その一つが下甌島の基地にある。こうした広域レーダー基地に適した地政学的な位置というものがあるのだろうか。航空自衛隊下甌島分屯基地がこの地に設置されたのは、島民の生活地図とはかなり異なる、幾重かの層をなす地政学的地図の上においてである。

下甌島に最初に設置された近代的軍事施設は、釣掛埼の灯台だった。密航船が、ちょうどその下の磯に密航者たちを置き去りにしたという、あの灯台である。

江戸時代には、現在の灯台がある付近に遠見番所（火立番所）が置かれて手打村の郷士が異国船

を見張り、また現在の手打港近くでは津口番所で幕府が出入り船舶を取り調べていた。こうした幕藩体制の小中華的地政学に、明治以降は対外拡張をめざす近代日本植民地主義の新たな航海図が重ね合わされる。1894～5年の日清戦争によって植民地に編入された台湾に向けて、日本内地から南西諸島を伝って延びる航路の上に、陸軍省臨時台湾燈標建設部は8か所の灯台を建設した。このとき九州と台湾を結ぶ直線上に位置する甌島もその間を直航する船舶にとって「極めて必要の標識地」とされ、1896年末、ここに8つのうちの1つの灯台が点灯したのである⁽³⁶⁾。

灯台は民間船舶に利用され、また沖合に漕ぎ出す甌島漁民にとっても有用な施設だったろうが、第二次世界大戦末期の1945年4月から8月にかけて米軍機による3回の空襲を受けた⁽³⁷⁾とき、その軍事施設としての姿があらわになった。同じころ、いっそう本格的な軍事施設が下甌島に設置され、この島に「電波を利用した本土防衛の前哨」というそれまでと異なる役割があたえられる。下甌歴史民俗資料館（現・下甌郷土館）元館長の橋口義民によれば⁽³⁸⁾、すでに敗戦の色濃い1943年ごろ「本土防衛の前哨戦のため」として陸軍電波監視隊55名が手打集落西側の牧山地区⁽³⁹⁾に派遣され、アンテナ塔と電探機器、さらに防空用の25ミリ機関砲一門を設置した。また、釣掛埼灯台付近の遠目地区には海軍電波通信隊43名が、短波受信機など電波機器と13ミリ機関砲一門を装備し、米軍や日本側のラジオ放送などを傍受した。しかしこれら二つの部隊は1945年8月の敗戦とともに本土へ引き揚げ、残された軍事施設も11月ごろに手打湾に上陸した米軍によって破壊され、そしてこの部隊も去っていった。

日本帝国主義の解体後も灯台は灯をともしつづけたが、島内の軍隊のプレゼンスはいったん途切れた。だが、その空白期間は短く、7年足らず後の1952年、今度は米軍が冷戦下の地政学的地図

とレーダーという新技術を携えて、姿を現す。「下甕島分屯基地創設回顧録」⁽⁴⁰⁾によれば、この年、米軍レーダー基地の建設地を設定するため、福岡施設局の係官が来島した。交渉は「南に位置する処」にはじまり、続いて手打の北側の集落である青瀬地区に持ちかけられたが、いずれも強い反対のために頓挫した。最後に、さらに北に位置する長浜地区への建設が、住民の反対を押し切って区の評議員によって受諾され、1953年に基地に向かう道路が着工された。『郷土誌』の年表は1954年の「100人余の米兵駐屯」を記しており、翌年には自衛隊要員も着任、その後数年をかけて米空軍から航空自衛隊に移管している。この基地はいまも島の中央の標高500メートルを超える山上にあり、急斜面を降りる道路で東岸の長浜港と結ばれている。今日の航空自衛隊下甕島分屯基地は、広く上空を監視するレーダーサイトであり、2008年に弾道ミサイル防衛計画（BMD）の警戒管制レーダーが設置された重要施設になっている。『郷土誌』は、自衛隊官舎で暮らす「隊員（現在約170名）やその家族も区民として長浜の歴史や文化に大きく関わっている」⁽⁴¹⁾という。

さて、このような地政学的な思惑と経緯で設置された施設は住民に何を求め、そして島民は施設をどのように見てきたのだろうか。

灯台の建設の当時、40戸ほどあった手打部落の住民は、建築物資の陸揚げと岬の上の現場までの運搬に動員されたようである⁽⁴²⁾。灯台が稼働して2か月後に初代灯台長が過労のため倒れ、死亡したが、「村民の哀悼のうちに、村長のはからいで、村長自宅の墓地に埋葬」されたという。灯台の建設が、村民にとって受け入れうるものだったことを示しているのだろうか。その後も1966年まで、灯台職員は家族ぐるみで岬に住み、子どもは険しい山道を越えて学校に通った。

しかし戦時の軍事施設建設では、住民の労働力

利用は苛酷なものだった。『郷土誌』には手打の女性の証言⁽⁴³⁾が記されている。

働き手の男子は戦場へ送られ、農業は女・子供の仕事になり、イモやコツパ〔サツマイモの切り干し〕、麦のめしも満足に食べられないような、苦しいつらい日々が続きました。

牧山に陸軍の防備隊、ツウメ〔遠目地区〕に海軍の防備隊が駐屯するようになり、防空壕に使う松の丸太を運んだり、電波探知機の機材を運んだりの重労働が、召集兵なみに女子に負わされました。

日本軍「防備隊」を招き寄せた「本土防衛の前哨」との位置づけは、敗戦の年になると米軍の空襲となって現実化した。『郷土誌』に掲載された「戦争体験」の多くは、敗戦直前の被害経験を（そして、それだけを）語っている。各集落ではたびたび機銃射撃を受けて死傷者を出しており、また射撃や爆弾投下がなくても「くる日もくる日も空襲で、ろくに働くこともできない毎日」であり、防空壕を掘り山中に疎開小屋を建てて、そこに避難して「毎日逃げまわって」いたという。海では1942年に10人乗りの釣船が漂流機雷と接触、爆発して全員が死亡し、1945年には漁船も空襲を受けている。さらに近海で米潜水艦が目撃されはじめ、住民は恐怖とともに米軍の「敵前上陸」をうわさする。ある女性は「終戦が10日もおくれたら、甕島も沖縄のようになっていたかも知れません」と述懐している。

その7年後、提示された米軍基地建設の計画に対して島民が強い反対を示したとき、その背景にこうした軍隊駐屯と空襲の体験があったことに疑いはなく、それは米軍だけでない軍隊のプレゼンスそのものへの恐れと反対だったはずだ。前述の「下甕島分屯基地創設回顧録」は、長浜区の基地建設受け入れを「この英断は間違っていなかつ

た」と評価するが、「長浜の評議員各位の断固たる決断と実行」は「人心不安定のなかで全島民のごうごうたる非難を受けながら」なされたのだった。

「回顧録」は、現在下甕島の基地に駐屯する航空自衛隊第9警戒群の創設42周年記念として書かれたものだが、そこで述べられた建設過程は、島民の基地に対する関心のありようを見せていて興味深い。

それは土木建築産業の文脈のなかに、すっかり消化され、摂取されている。建設されているのが軍事施設であることはもはや問題にならず、米軍の姿もみえない。上陸してきたのは、兵士ならぬ「北は新潟から南は鹿児島までの」全国土木業者一千人の大部隊であった。「回顧録」に記された島民の動員は、下請け業者の佐川組に「長浜在住のN氏が従業者10名をもって合流、一緒に仕事をした」にすぎない。そうした基地建設が長浜区にもたらしたものは、「それが縁で、佐川清氏とN氏は深い絆で結ばれたことと、「尚、長浜区においても敷塩神社の参道建設の寄付金を戴いて過分な御芳志を受けた」ことであった。そして当時「九州海運株式会社長浜営業所長」だった「回顧録」執筆者は、重量物でありながら精密、高価であって「厳重な取り扱いが要求され」、「総てが手作業で行わなければなら」ず、「常に緊張の連続であった」レーダー器材搬入作業を、なにより詳しく説明している。

その他、自衛隊基地と島民との関係について『郷土誌』は、下甕島西岸の山中の集落、内川内地区に自衛隊員が「電柱等資材の総て」を運搬したおかげで「昭和三〇年十二月二十七日午後四時二十分に「初めて区民は電灯の光に接した。一同感激一杯であった」こと⁽⁴⁴⁾、そして長浜地区内の開拓地「檜の木」集落の火災に自衛隊員3名が駆けつけたが、5戸全戸が焼失して集落が消滅したこと⁽⁴⁵⁾を記録している。

電波による広域の空の監視という基地の業務も、官舎に住み定期的に転任していく自衛隊員の生活も、島に住み続ける住民の暮らしと交差する機会は多くなさそうだ。私の短い滞在中、手打地区では自衛隊の存在を感じることはなかった。

6. 戦時移住

戦時下で住民は島のなかで労働力として動員されたが、戦争はまた人びとを島の外に動かし、あるいは島に返した。そうした移出入をここでは「戦時移住」と呼ぼう。

さいしょに挙げるべき戦時移住は出兵だろう。

『郷土誌』は、島から召集された軍人や軍属の数を記していないが、戦没者の顕彰のために村内6地区に建立された「大東亜戦争戦没者之碑」「太平洋戦争慰霊碑」などに記された名を挙げている。それらを合計すると、第二次世界大戦中の戦死者は385名になる。

賃労働や教育を動機とした移住も、戦時には特別なかたちをとることがある。とくに戦争で獲得された植民地への移住は、戦時移住の典型として挙げられるだろう。すでに1927年の時点で、上甕村の県外出稼ぎ者167人のうち24人が「満州・台湾」へ渡っていたことは、前に述べた。そして私たちにとってさらに重要な一例を、このあとでみることにする。

第二次世界大戦末期には、空襲などの危険を避けて、出稼ぎ先や移住先から島に帰還する人びとがあった。京都から島に帰った女将さんの家族がその例である。しかし、同じ危険が、学童疎開では逆に人びとを島の外に連れ出した。1945年5月から8月にかけて、下甕村内の国民学校4校に在籍する2年生から6年生までの児童計672人が、鹿児島県内に疎開した⁽⁴⁶⁾。同じ時期に大都市から島に避難した場合と違って、学童疎開は強制的だった。『郷土誌』によれば、下甕村青瀬地区で

は「校区挙げて絶対反対であった」が実施され、手打の女性も「強制学童疎開で、小学生たちが、[米艦船の攻撃を避けて]夜中ひそかに汽船に乗せられて出港するとき、親子、家族が泣き別れたあの情景を忘れることはできません」と語っている。

疎開先では食糧不足や病気などに苦しめられ、手打国民学校の児童一人が死亡した。私がお話を聞いた信子さんも、国民学校5年生のときに樋脇町[現・薩摩川内市樋脇町]に疎開したが、「もう、辛い目にあったんですよ」という。「2か月と5日」と記憶しているので、日を数えて過ごしたのだろう。「辛い」体験を尋ねても、「いまの子どもに言うても、分からない。ほんとなあ、戦争ちゅうのは、戦争はないほうがいいですよね」という。

学童疎開の理由を尋ねると、信さんは「艦砲射撃されるから、危ないから」だったという。だが、ここでも同じ状況認識が人びとに逆方向の行動を取らせている。『郷土誌』に納められた青瀬地区の証言は、「やがて甑島が敵艦隊の砲撃で全滅するという噂が広がり始めると、親が[疎開先に行って子を]連れ帰るようになった。帰る途中で空襲に遭い、郷里に帰れない犠牲者もあった」という。おそらく他の地区でも、そうしたできごとがあっただろう。

戦争が終わると、島外から多くの人びとが帰郷した。国勢調査にも、1940年の9,400人から47年の10,860人と、下甑村の人口の一時的な膨張がはっきりと現れている⁽⁴⁷⁾。私がお話を聞いた小倉義富・元村長は、「戦後、一度に引き揚げてきたので集落が飽和状態になった。その後ふたたび外に出て行かざるをえなくなった」ことを記憶している。

ここで、島で人びとが「引き揚げ」というときの言葉の用法に触れておきたい。国語辞典では「引き揚げ者」は「外国から引き揚げて本国に

帰って来た人。特に、第二次大戦後、外地での生活を引払って内地に帰って来た人」（『大辞泉』）とされている。しかし島の人びとにとって、戦地や旧植民地からであれ、あるいは出稼ぎ先の京阪神の都市からであれ、島への帰郷者は「引き揚げてきた」のである。日本帝国の「内地と外地」の区別をそのまま戦後東アジア国民国家体制の「本国と外国」の別に横滑りさせて、外地＝外国からの帰還者を「引き揚げ者」と呼ぶ国語辞典の語法——私もそのように理解していた語法——とは、かなり異なる空間認識がそこにはある。

あらためて聞き直すと、小倉氏は「戦後引き揚げ者は、満州、朝鮮、台湾からもあった」といい、日笠山直宏・手打コミュニティーセンター長も、満州移民について尋ねると「多いというほどではなかったと思うが、たしかに引き揚げ者があった」という。私が二人に満州移民について尋ねたのは、その前に驚くべき事例に出会ったからである。

20年前の中国人密航事件で通訳を務めた役場職員は、昭正さんという。なぜ、昭正さんは中国語の通訳ができたのか。かれは中国とどんなつながりをもっているのか。下甑島を訪ねて、私がまず知りたかったのは、そのことだった。以下、かれの経歴を簡単に記しておきたい。

昭正さんの祖父は、イゴロウさんといい、明治時代の学校教師だった。勉強のため鹿兒島に帆掛け舟で渡った青年である。戦後、ソ連に抑留されていた息子や孫の昭正さんを待ちながら、脳溢血で亡くなった。

父は稲雄さん。下甑島の青瀬地区などで小学校教員をしていたが、暮らし向きはそれほど豊かではなかったようだ。稲雄の弟、つまり昭正さんの叔父は豊秋さんといい、満州国国務院に農業指導者として着任し、夫婦で満州で暮らしていた。こ

の豊秋さんが、甥の昭正さんを満州に呼び寄せた。

昭正さんの兄にも触れておく。兄は長男で台湾に渡り台湾師範学校を卒業、教師になるが、翌年19歳で軍に志願、1945年4月30日に死亡した。昭正さんの奥さん、信子さんは稲雄さんの妹の子であり、昭正さんと信子さんはイトコ同士である。

つまり、昭正さんと信子さんの家は教員一家であり、子弟の教育に力を注ぐ家であった。明治以降の手打の社会構成を考えれば、麓に属する家だったことはまず間違いないだろう。

さて、昭正さんは1929年4月に、9人兄弟の二男、姉と兄2人に続く3番目の子として生まれた。1944年に国民学校高等科の卒業を前に、陸軍特別幹部候補生（特幹）を志願するが不合格となる。学科は通ったが身体検査ではねられたという。昭正さんはこれを「特攻隊の試験」と呼び、実際「私の2年ぐらい上の組は、特攻隊で亡くなっている」。

翌1945年、叔父の豊秋さんに招かれ、叔母に連れられて満州に渡った。なお、終戦時に豊秋さんはソ連に抑留されたが、昭正さんよりも先に帰国を果たしている。また、いっしょに渡満した叔母さんや豊秋さんの妻子は、終戦からまもなく帰国した。昭正さんだけが、終戦後も9年間、帰国できないままだった。

満州では4月に新京特別市南嶺（現・長春）の満州国国立国務院経理学校に入学した。15歳である。国務院経理学校は「満州国」の官吏養成機関で、開校2年目で昭正さんは第2期生だった。昭正さんは、国務院に勤務していた叔父の「ツテで入れた。そうでなかったら入れなかった」と謙遜しているが、かなりのエリート教育機関だったようだ。

この学校と生徒たちの敗戦後の経緯についてはほとんど記録が残されていないが、第1期生の証言にもとづく田村達也「巻頭言にかえて——海

を渡った満州国務院経理学校の少年」⁽⁴⁸⁾が詳しく、また昭正さんの証言とも概ね一致する。学校は全寮制で、2学年それぞれ日本人生徒約40名ずつが軍隊式の生活を送っていた。軍事教練の他、授業は「詰め込み式」だったという。授業は日本語で行われたが、中国語、英語、朝鮮語、ロシア語の4か国語の授業もあった。だが、学校生活はわずか4か月で終わってしまったので「何を学んだのか、さっぱり」。学んだ中国語も、後の生活ではまったく役に立たなかったという。

昭正さんが語ったところでは、8月15日の日本敗戦時には新京の経理学校におり、それから日本に帰ろうと、教師に引率されて生徒ら80人が安東（現・遼寧省丹東）までたどり着いたが、ソ連軍の進攻によってそこで足止めされた⁽⁴⁹⁾。

安東での1か月の共同生活では、住民が食糧を持ち寄ってきてくれたが「それもつかの間」で、食糧が途絶えると、もはややっていけないと、教師が解散を宣言して、一人ひとりが自力で生きのびることになった⁽⁵⁰⁾。「今度は、中国人のところに働きに。水汲みやら、皿洗いやら、いろんなことをしましたよ。食べさせてもらうだけで、お金はもらわない」。中国語が分からないため、自力生活は困難だった。

その後は「乞食生活」をししばらく続けた。3か月間ほどだと思いがはっきりしない。冬の季節にこも菰を被って寝ていたことだけは覚えている。共同生活を解散したときの50人ほどは、その後の3か月間にばらばらになったが、昭正さんは国務院経理学校の元同級生で申木野出身のイチキさんと2人で生存生活を送った。後に、昭正さんよりも先に帰国した人も多かったことを知ったが、腸チブスやコレラに罹って死亡した人もあった。

路上生活のある日、「日本人解放学校」という看板が2人の目に止まる。食べさせてもらえるかと立ち入ると、中に呼び込まれ「上から下まで」着替えさせられ風呂にも入れられて、その後3か

月間の学校生活が始まった。日本人解放学校⁽⁵¹⁾は、昭正さんによれば、岡野進こと野坂参三の指導下で運営されていた。当時中国共産党に所属し、のちに日本共産党幹部となる、野坂参三である。授業はすべて日本語で行われたが、教科書はなく「ただ口頭で」なされた。授業内容は、当然ながらマルクス・レーニン主義や毛沢東思想についてだが、昭正さんによれば「[毛沢東、マルクスといった]そういう人たちが、偉い人や、どうやこうやというようなことしか、話さなかったですよ」。歴史についての講義はなかったという。3か月の学校は「なにがなんかわからんうちに、もう、ちょうどトンネルみたいだったですよ」。生徒は、5、60名の日本人で、元関東軍兵士がとくに多かった。年齢は24、5歳から、30歳くらいだったので、16、7歳だった昭正さんと友人はいちばん年下だった。

日本人解放学校で3か月の教育が終わると、昭正さんたちは国共内戦を戦っていた共産党軍、「八路軍砲兵団指令部」に編入された。砲兵団の「ものすごい」人数の兵士のあいだに、20人ほどの日本人がひとまとめに置かれた。

昭正さんたちは「将校待遇」を受けた。「モーゼルの拳銃をあてがわれて、朝昼晩のご飯は白米のご飯を食べさせられて」。「日本人は、仕事っていうのはないんです。軍隊の中では、ただ朝昼晩、飯を食べるだけ」。日本人を編入した目的はわからない。「まあ、ある程度は、宣伝工作もやりました。日本が中国人を痛めつけて、という劇のようなことをして、私たちは芝居を[中国人に見せた]。まあ、そういうことしかしていなかったですよ」。

そのころ、安東に残っていた日本人が中国人に所持品や財産を奪われるできごとがしばしばあり、あるとき昭正さんが「服[軍服]にものをいわせて」追い払うと、その件が理由となって日本人解放学校で再教育を受けることになった。再教

育が終わり昭正さんは元の砲兵団指令部に戻される。そのころ、砲兵団は一時、国民党軍に押されて朝鮮領内に退却した。これをチャンスとみた昭正さんたち日本人10人は逃亡を試みたが、すぐに捕捉されてしまった。捕まった昭正さんたちは、「鴨緑江の岸に10人が並べさせられて、後ろに銃をあてがわれて、それでいち、にい、さん、イー、アル、サン、というあいだに、誰が逃亡計画を企てたか、張本人が言え、というんですよ。そしたら、私の横におる人が、あややあとと言ったんですよ。私たちは解放されて、車に乗せられて、それと同時にその1人だけが殺された」。昭正さんは10年ほど前から書き記してきた自筆手記を見せてくださったが、そこではこの事件を昭和21年12月のこととしている。このできごとの後、昭正さんは他の日本人とは引き離され、1人になった。他の日本人のゆくえは分からない。

その後、共産党軍が攻勢に出るとともに、昭正さんが属する砲兵団指令部は中国全土を行軍した。昭正さんは、「どこをどういうふうに通ったか、ぜんぜん……。ただ、ついていだけですから。いまここ、中華にきたとか、やれ北の方は内蒙古にきたとか、そういうやつは、聞いて初めて分かるというような状態。どこをどういうふうに連れていかれたのか、分かんですよ。ちょうど夢の国を彷徨っているような状態ですよ」。自筆手記は、「昭和22年1月より八路軍が攻勢に出、安東-奉天-新京-チチハル-内モウコー-北京-海南島と4年間中国内戦に参加」したという。移動手段は、徒歩や騎馬で、乗馬はこのときに覚えた。帰国した当初、昭正さんは飼っていた子牛に綱も鞍もつけずに乗って山に行き、当時結婚前の信子さんを驚かせた。

行軍のときも、昭正さんの待遇は特別だった。他の兵隊は「コーリャンとか、ああいうのを食べる」が「私だけは白米の飯」で、これがなにより「ありがたかったですよ」。食事は一般の兵士と

は別に20人くらいの幹部と食べた。就寝の場所や服装も区別されていて、他の兵隊の制服はカーキ色の「ざあとした服装」だったが、昭正さんは「紺色の濃い服装」だった。こうした待遇を、昭正さんは「解放学校を出たという肩書き」のためと理解している。それというのも、日本人解放学校を指導した野坂参三は中国では「毛沢東と同格の並ぶ人」であり、「野坂さんのおかげで、白米の飯を食べさせられたんです」。

待遇では一般の兵士と区別されたが会話の制限はなく、兵隊たちの会話を聞き、またかれらと話をして、中国語をある程度は話せるようになった。だが、読み書きをふくめて中国語を「ほんとうに覚えた」のは、後の大学病院でのことだった。

八路軍との行軍を思い返して、昭正さんはこう言う。「長いですからね、4年間ですからね。それでもまあ、よう歩いたもんだと思いますよ」。そして「やっぱり、精神的にまいったです。……いやあ。どうなのか。いつ、日本に帰ってこられるのか、ただそれだけだったですよね」。帰郷した昭正さんを迎えた国民学校時代の同級生は、昭正さんが卒業までは体が大きかったのに、帰ってきたら背が伸びていないので驚いた、と信子さんに語ったという。

そうしたある日、昭正さんは奉天の中国医科大学病院に配属される。大学病院での最初の仕事は、日本語医学書の翻訳の補助だった。翻訳は中国人医師が行い、この医師が昭正さんに疑問点を尋ねた。医師は40歳くらいの穏やかな人で日本語は堪能であり、昭正さんはこの人物から中国語を教わった。翻訳書の内容は、「ただ聞かれたことを話すだけ」だったので分からない。翻訳作業は半年ほど続いた。他の中国人医師と接することはなかった。

翻訳以外には、病院の拭き掃除などの雑用を行った。学生の人体解剖実習のために死体を運ぶ

仕事もした。給料はなかった。病院の生活は「無理なことはいわれんし、ただあてがわれた仕事をするだけ」だったので、軍隊生活よりもよかったという。

中国医科大学病院には、昭正さんの他に、日本人の看護師や医師がいて、看護師とは日本語で話しができた。「大学病院の一番上」はマツバラ博士で、昭正さんは腸の鉤虫こうちゅうを取ってもらって「命拾い」をした。

ある日、2、30人いた日本人医師・看護師そして昭正さんが一室に集められ、昭正さんだけが「日本に帰れるようになった」と告げられた。他の人たちが何を言われたかは分からない。その後の奉天からの帰途も「どこをどう連れてこられたか、分からない」が、港には4、50人の日本人が集められていた。そしてそこから舞鶴港へと到着したのだった。信子さんは「一番最後の興亜丸で帰ってきた」という。

自筆手記は、舞鶴から下甕島までの道程をつぎのように記録している。「昭和28年3月日本に帰還舞鶴につく。帰還列車の中で参議院議員西郷吉之助さんと語る。福岡でUさんが迎えに見えた。列車の中には鹿児島県人帰還者は2名だけ。串木野に来て市民の歓迎を受けた。……串木野から手打までは汽船で手打につく港では島民の歓迎を受けた。」

『郷土誌』や戦後の調査研究は満州など旧植民地・外地への移住をほとんど扱っていないが、昭正さんと信子さんは多くの村人が満州に渡ったという。お話のなかには二つの例があった。ひとつは「満蒙開拓青少年義勇軍」で、1945年に島の国民学校高等科を卒業した少年たちがこれに志願して渡満したという。昭正さんが日本を発ったすぐ後のことであり、また記録では確かめられなかったが、おそらく6月に渡満した最後の青少年義勇軍の一群⁽⁵²⁾に入っていたのだろう。

もうひとつは、中国残留孤児の二家族が手打を訪れ、役場に勤めていた昭正さんがその通訳や身の回りのお世話をしたときのことである。いつのことだったかご夫婦は覚えてなかったが、1983年ではなかったかと思われる。手打出身の女性が夫とともに満州に渡り、夫が死亡したのち女性は日本への帰還途中、子ども2人を中国人に預けた。その姉弟が手打の浜に住むイトコを頼って来たのである。

中国残留孤児の姉弟は、それぞれ配偶者と2人の子があり、2家族8人で来た。姉は、中国で医師をしていた。2家族は生活保護を受けながらイトコの家に1年、留まっていた。そのころ昭正さんは役場で税務を担当していたが、この2家族を世話するため生活保護の仕事もかけもちした。ご夫婦と2家族は、中学の制服をあげたり、餃子をもったりと家族ぐるみのつきあいだった。最後は、昭正さんが大阪まで船で付き添い、見送ったという。

2家族が去ってから、1年ほどして届いた手紙には、「大海に漂う一枚の木の葉を、昭正さん信子さんが救ってくださいました」という一節があったことを、信子さんは覚えている。

その後の消息は、浜のイトコが教えてくれた。姉も弟もすでに亡くなり、子の2人が再び日本を訪れたとのことだった。

7. 空腹体験

1953年に帰国してからしばらく、昭正さんは島で農業をした。昭正さんの弟が川崎に働きに行き、田畑の働き手がなくなったからだった。牛も1頭だけ飼っていた。24歳になった昭正さんにとって、農作業はやったことのない仕事でたいへんだったという。現金収入はなく「食べるだけ」だった。

昭正さん夫妻は1957年に結婚した。結婚は早く

決まっていたが、経済的に余裕がなく挙式が遅れたようである。島では収入になる仕事なかったため、1960年ころに昭正さんが神戸に出稼ぎに行き、神戸製鋼の下請けで10年ほど働いた。それまでに2人の子どもが生まれていた。信子さんと子どもたちも、一時神戸に身を寄せた。

神戸から帰った昭正さんは、手打の農協に1年勤めたあと41歳で役場に就職した。役場勤めのかたわら、農業も営み、耕地整理した水田4反歩で米を作り、麦、芋、空豆なども栽培していた。

満州帰りの昭正さんにとって、帰郷後の困難は経済面だけではなくた。夏の夕方、浜辺に若者たちが涼みに出ている。そこに昭正さんがいくと、一人去り、二人去りして、いつのまにか誰もいなくなっていた。「私のことを恐かったんでしょう」。陰で「共産党だ」「赤だ」と言われ、ひとがよりつかなかった。思い出すと「排斥されていた」「居づらかった」という言葉も出てくる。

県庁や貿易省からの仕事の誘いもあったが、父親が「外に出るとろくなことにならん。警察になにをされるか分からん」と言って、島から出してもらえなかった。結婚するときにも、信子さんは長兄から「共産党だとわかっているのか」と言われたという。

日常の振る舞いにも島の人の目を引くところがあつた。帰島したばかりの昭正さんが冬に海で泳いでいると、「人からあの子は馬鹿じゃないか、ち言われた」ことを信子さんは覚えている。中国の寒冷地で過ごしてきた昭正さんにとって、下甕島の海は冬でも暖かかったのである。

だが、そうした偏見は時とともに薄れたようだ。島の医師、登記所長、派出所長といった面々が飲みで集まると、昭正さんが電話で呼びだされた。60歳の定年後は飲酒を止めていたので、昭正さんは「ついて歩くだけ」だった。昭正さん信子さんは、そんなときの逸話を面白そうに語って

れた。

お話を聞いたとき昭正さんは87歳。6月に顔面神経痛を患い、話しくそだ。この年、田畑の仕事も止めた。

こうした経験を持つ昭正さんが、20年前、警察による密航者の尋問に通訳者として立ち会った。取り調べは、朝の6時から夕方4時まで続いた。警察官は「根掘り葉掘り、時間の経つのも分からないほど」尋問を続けたが、密航経路などを尋ねられても、密航者たちは黙秘を続け、何も分からないまま終わった。

昭正さんは「この人たちは、出稼ぎに来た人たちだから、悪いことしに来た人たちじゃないから、手荒なことはしないように、と警察のひとに言ったんです」。早朝、旅館に食べ物を求めて通報され、捕まった密航者は、取り調べ中も「もうご飯を食べてないから、腹ぺこだと、何か食べさせてもらえんかどうかと、言ったんですよ」。昭正さんも食べておらず、「腹がひもじくなって、食べさせてくれと言ったんです」。「そしたら、派出所の人が、握り飯をポケットから出して、ほら、私なんかもまだ食べてない、と。こんな調子ですよ。あれには、まいったですよ」。それでも警察官は、最後には「引き受けました、と。[密航者たちに] 食べさせますから」と約束した。

昭正さんが「まあ、しかし、たいへんだったです」と繰り返すので、そう感じたわけを尋ねた。「やっぱり、なんちゅうかなあ、差別感ちゅうかなあ。差別感があったですよ。警察の対応が。あんまり、親切ではなかったです」。昭正さん自身が、なにか疑われたと感じた。警察官に「あなたは、いつからここに住んでるんですか、と言われたんですよ」。「どういうあれか[どうしてそんなことを言うのか] 知らんけど、そういうふうに言われたから、あとは知らん、と」帰ってきてしまった。「私に対しての、ここの警察官の、こ

れ一風変わった、日本人であって、日本人でないっち、人間じゃない、あったんじゃないでしょうかねえ」。昭正さんに「排斥された」記憶が蘇ったに違いない。

中国語も分かる昭正さんが中国からの客人に他の住民とは違う感情をもつとして、自分自身や親族が中国や満州に移民に行ったことのある手打の住民のなかに中国に親しみを感じる人はいなかったらうか、といくぶん見え透いた質問をすると、二人とも、それはない、という。信子さんは「もう戦争中だから、辛いことばかりで」といい、昭正さんは「かえって逆。私ぐらいの組[世代]は、中国人と聞いたときは、恐かったと思うんですよ」といった。私にこう言ったとき、かれの脳裏をよぎったのはこんなイメージだったはずだ。

[安東にたどり着いた] 私達学徒八十名は、朝鮮人学校の大正校で一ヶ月近く共同生活をすることになりました。そのような中で、日本が敗けた事を喜ぶ中国人達の催しが、毎日のように行われていました。

催しの中で、今もなお心と夢の中に現れてくるものがあります。それは、中国人達が、チャイナ服を身に付けて、手に青龍刀を持ち、高足踊りの出で立ちで中国ばやしのドンチャン・カンチャンの鐘や太鼓、胡弓等で踊る光景でした。それは、生まれて初めてみる口で言い表す事のできない、恐怖の世界でした。今にも私達は殺されるのではないかと、不安な毎日が続きました。⁽⁵³⁾

だがそれでも、こうしたかれの恐怖を知ったいまでも、私はこう考えることが妥当だと思う。昭正さんが警察官に食事を要求したとき、かれは密航者たちの空腹を引き受け、かれらの空腹を自分の空腹と感じたのだった。そしてこの共感、安

東の街で餓死寸前の空腹を体験し、八路軍で白米をありがたいと感じながら食べたことと、やはり関係があるはずだ。

だとすれば、昭正さんの共感、女たちが「お腹がすいていた」密航者たちが「かわいそう」と噂するときの同情とは、その背後に広がり、それを支えるものが違う。彼女らの場合、それは「いまの子どもに言うても、分からない」学童疎開や敗戦後の人口膨張と食糧難のなかで、自分自身や周囲の子どもたちが経験した空腹だったのだろう。あるいは女たちの所作に、かつての海難救助や婚姻儀礼の握り飯の民俗的記憶を見てとることも、それほど難しくないのかもしれない。

現代社会においてステレオタイプが成立するさに「国民的」な枠組みが必ず作用することは、それがどれほどシニカルに響くとしても、ここで指摘しておかなければならない。だから私は、「騙されて来た、お腹がすいていた、かわいそうな」中国人への紋切り型の同情に忍びこんだ民族的優越感に気がついていることを、告白すべきかもしれない。

だがそうだとすると、と私は考える。20年前に手打の人びとが密航者に差し出した握り飯と同情は、同じころ全国レベルの密航対策キャンペーンを隠然と支えていた「侵入者」に対するいじましい縄張り意識とは、どこか深いところで異なっていたはずだと。だからこそ、後者と冷戦後の軍事動向との密接な関連がまさに下甌島密航事件をめぐる言説に顕著に現れたのに対して、そうした軍事的展開とはおよそ無関係に、いまも島の人びとは「かわいそうな」密航者の話を聞かせるのである。

註

- (1) 下甌島手打地区の調査は、2016年9月6日から8日までおこなった。
- (2) 古屋哲「国境再編における国家の暴力——出入国管理、警察、軍事」森 千香子、エレン・ルバイ編『国境政策のパラドクス』勁草書房、2014年、105-138頁。
- (3) 藤岡謙二郎編『離島の人文地理——鹿児島県甌島学術調査報告』大明堂、1964年、163頁。下甌村郷土誌編纂委員会・編『下甌村郷土誌』下甌村、2004年（以下『郷土誌』）、1190頁。
- (4) 1955年の調査は岩切成郎「後進地域の村落支配と漁業生産の形態——鹿児島県甌島の調査」『漁業経済研究』4巻3・4号、1956年、66-81頁。1961年は藤岡前掲。『郷土誌』は、おもて表紙には『下甌村閉村記念 下甌村郷土誌』と記されている。
- (5) 藤岡前掲、91頁。
- (6) 同、205頁。数値は「1960年世界農林業センサス結果表」による。
- (7) 『郷土誌』、341頁。
- (8) 岩切前掲、68、71頁。藤岡前掲、207-208頁。
- (9) 竹田旦「甌島における若者と婚姻」『離島の民俗』岩崎美術社、1977年、12-38頁。
- (10) 岩切前掲、68頁。藤岡前掲、206頁。
- (11) 藤岡前掲、206頁。
- (12) 岩切前掲、69-70頁。
- (13) 同。
- (14) 藤岡前掲、211-223頁。『郷土誌』、366-368頁。
- (15) 藤岡前掲、245-246頁。
- (16) 岩切前掲、74-75頁。
- (17) 「追込網」は、音や光で魚群をおどして網に追い込む漁法。「磯建網」は、刺網の一種で、仕掛けた網にイセエビ、ヒラメなどを絡め取る。cf. 鹿児島県『鹿児島県水産技術の歩み』鹿児島県、2000年

- (インターネットにpdf版がある)。
- (18) 藤岡前掲、229-232頁。
- (19) 同、166頁。
- (20) 同、167頁。
- (21) 『郷土誌』、433頁。
- (22) 竹田前掲、17頁。
- (23) 藤岡前掲、207-208頁。
- (24) 同、91頁。
- (25) 竹田前掲、18頁。
- (26) 鹿児島県前掲、758-759頁。
- (27) 「巾着網・巻き網」は、機動力のある漁船で曳く網を用いて魚群を捕獲する漁法。
cf. 鹿児島県前掲。
- (28) 『郷土誌』、431-432頁。
- (29) 藤岡前掲、167-169頁。
- (30) 同、197頁。
- (31) 同、168頁。
- (32) 同、170頁。
- (33) 藤岡前掲、167、256頁。『郷土誌』、1190頁。
- (34) 「ブリ飼付」は、大量の餌を撒いてブリの群を寄せて釣る漁法。「鯛飼付は投機的とはいえ収益性高きものであるが、〔手打では〕地元魚仲買商人経営である(岩切前掲、74頁)。cf. 鹿児島県前掲。
- (35) 下甌村役場編『下甌村郷土誌』下甌村、1977年、175頁。数値は外国人登録統計によるものと思われる。(同書は以下『旧・郷土誌』とする)
- (36) 灯台研究生「明治の灯台の話(42) — 釣掛埼灯台」『燈光』平成23年8月号、公益社団法人 燈光会、2011年、6-17頁。
『郷土誌』、1209頁。
- (37) 灯台研究生前掲、13頁。
また、技術の軍事・民生の両側面をうかがわせる別の例として、『郷土誌』の巻末年表には「1905年 下甌村に海底電信線布設(最初は専ら軍用)」 「1906年中甌、手打の両局 電信事務開始する(甌島電報事務の最初)」とある。
- (38) 『郷土誌』、1214-5頁。
- (39) 2.5万分の1地形図「手打」には、手打地区の西方の山中、200メートルの尾根付近に「牧場」の地名が見える。また、『旧・郷土誌』には、「牧場跡地(牧山)入植開拓」計画(事業開始予定1957年3月)がつぎのように紹介されている。「一、牧場跡地の沿革 寛永六年(1709年)薩摩藩が下甌牧場として設定、馬121頭を放牧、明治2年に廃止した。その後、原野となり、共有、私有入りまじって開墾、切替畑、採草地として利用していた広い地域である。……四、開拓面積 82.84ヘクタール……八、営農実施計画 営農計画は、肉牛、牧草、甘藷を主体とし、水稻、ソサイ、ルービンの生産をあげる。」(177頁)
- (40) 『郷土誌』、1328-1332頁。
- (41) 『郷土誌』、1306頁。なお基地の自衛隊員は増員され、2015年現在で約200名である。
- (42) 灯台研究生前掲、16頁。
- (43) 『郷土誌』、1213頁。
- (44) 同、1287頁。
- (45) 同、1326頁。
- (46) 同、788-789頁。『郷土誌』の記録は『鹿児島県史』第五巻による。ただし、県史に記録されていない疎開があり、県史では手打から児童99人が鹿児島県樋脇町の1校区に疎開したとされるが、浜添邦輝『鹿の子百合の学童疎開』には、同99人をふくむ児童383人と職員等合わせて418人が疎開したと記されていることが、同じ『郷土誌』に紹介されている。

- (47) 同、1190頁。
- (48) 田村達也「巻頭言にかえて ——海を渡った満州国務院経理学校の少年」『鳥取地域史研究』7号、1-7頁。田村は2年生に約40人の中国人生徒がいたとしているが、昭正さんはそれに言及していない。
- (49) 田村前掲によれば、国務院経理学校の生徒と教師は、8月9日のソ連軍侵攻のち12日深夜に新京を列車で出発し、15日の「玉音放送」時は車中においてその日のうちに安東に着いた。これが事実であろう。
- (50) 横川昭正「忘れられぬ思い出」下甕村教育委員会・編『下甕文化』4号、2001年、201-204頁。「思い出」には、「大正校での共同生活」と自力生活の間に「満鉄職員社宅での生活」があったと記されている。田村が採録した証言も同様である。
- (51) 「日本人解放学校」については「国務院経理学校」よりさらに資料が乏しい。飯田忠雄（「引き揚げ者体験記」『平和の礎IV』平和祈念事業特別基金、1994年）のごく簡単な言及以外にはみあたらなかった。
- (52) 白取道博『満蒙開拓青少年義勇軍史研究』北海道大学図書刊行会、2008年、212頁。
- (53) 横川前掲。